



SIAF
LAB

SIAFラボ通信 第3号

サイアフ

SIAFとは、2017年に2回目が開催される、札幌国際芸術祭 (Sapporo International Art Festival) の略称です。

SIAFラボは、札幌市資料館内にある札幌国際芸術祭の活動拠点です。

SIAFラボ通信は、札幌国際芸術祭の拠点であるSIAFラボから不定期に発信する「かわら版」です。

ラボで起きる出来事はもちろん、札幌の街や、時には全国へ飛び出して、

さまざまな人の言葉を集め、紹介します。

いろんなジャンルや、たくさんの人の繋がりを生み出し、

その繋がりに、またまた偶然生まれるコンテンツ。

そんな「かわら版」を目指しています。

INDEX

アーティスト・インタビュー「大友良英×札幌」 P1-2

大風呂敷制作チーム座談会「大風呂敷を広げよう」 P3-4

SIAFラボ編集局 編集会議「札幌の色ってどんな色？」 P5-6

北海道コラム「なしてか読まざる」 裏表紙

このシリーズでは、アーティストや音楽家など様々な人に自身を大切にしているものや、札幌を中心に活動を向い、同時に「札幌」の印象やイメージなどをお聞きします。

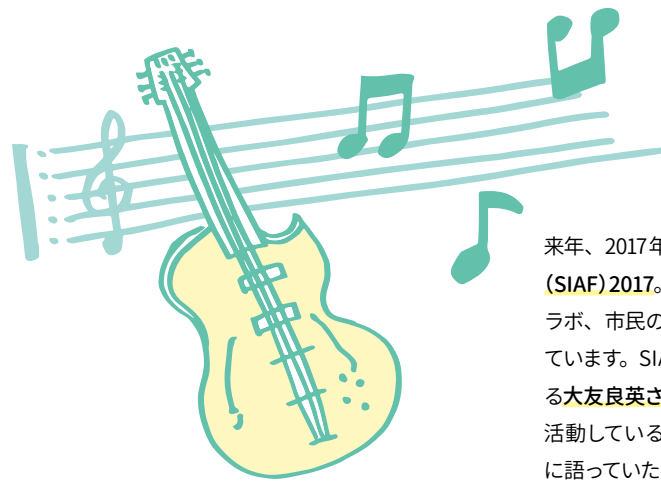


撮影：クスミエリカ

大友良英 おおとも よしひろ

1959年、神奈川県横浜市生まれ。実験的な音楽からジャズやポップスの領域まで作風は多種多様、その活動は海外でも大きな注目を集める。札幌との縁は古く、長年にわたりさまざまな音楽企画に参加、出演し、音楽家としてのキャリアを積み重ねていく。2012年以降、札幌でも「プロジェクト FUKUSHIMA」の活動を展開してきたことがSIAF2014に取り上げられ、「さっぽろ八月祭」を生むきっかけとなった。

また、映画やテレビの劇伴作家としても数多くのキャリアを有し、2015年、SIAF2017のゲストディレクターに指名される。



大友良英 × 札幌

来年、2017年に本番を迎える札幌国際芸術祭(SIAF)2017。現在、参加アーティストやSIAFラボ、市民の方々と様々なプロジェクトを行っています。SIAF2017のゲストディレクターである大友良英さんが普段どんなことを考えて制作活動しているのか、札幌の印象など、赤裸々に語っていただきました。

▼大友さんが音楽制作の場や、表現する上で大切にしていることは何ですか？

そもそも、何のためにやっているのかってことに尽きるような気がします。そのことから踏み外さないってことなのかな。なので、現場によって何が重要かは、変わってくると思うんです。盆踊りの現場と、*劇伴の録音の現場では、どこに力点を置くかは全然違うし、ノイズのラップの現場でも全然違う。それでも共通しているのは、この現場で、自分の音楽はどういう意味をもっているのか、何を求められているのかってことを基本に置いているってことです。ただし、それは相手が求めればなんでもやるって意味では全然ありません。求められたことと、それに対して自分ができること、できないことは明確にした上で仕事を受けてますから。あと、役立つことをやるって意味でも全然ありません。本来音楽なんて何かの役に立つためにやるものじゃないですから。そうではなく、祭りの現場があったとして、この祭りはそもそも何のためにやっているんだってことと、そこの音楽はどういう役割を担っているんだってことを、ちゃんと考え続けるってことだと思ってるんです。

その上で、その「場」が成り立つために、どう人とコラボレートしていくのか、どうアンサンブルを組んでいくのかを、自分の中の思想と、うかが哲学のようなものと折り合いをつけながら、なるべくフェアにやっていく……ってのが理想なのかな。「フェア」であることか、「どう」シェアしていくのかってあたりは、重要なキーワードだと思ってる。

あと、これは自分自身の根っこがギタリストであるってことと関係あると思うんですが、例えば一緒に歌う歌手が、どうやればより良く歌えたり、より輝けるかってことを常々考えてきてるんです。ギターってのは伴奏楽器ですから。なのでプロデュースする際も、やはり、どうしてもそういう視点でものを考えるクセがあります。自分の基本は、リードをとることではなく

伴奏なんです。だから劇伴の仕事が合ってるんだと思います。よく芸術家をばかにする呼び方で「あいつは職人だから、みたいな言い方があるけれど、自分は音楽の職人でありたいと思ってるし、そうであればいいな思っています。従来の職人のあり方とは違うかもしませんが。

▼プレーヤーとして関わる場合と今回の様にディレクターという立場で関わる場合ではどちらが難しいですか？

ディレクターのほうが全然難しいですよ。会議とかめっちゃ苦手でし(笑)現場で色々言いながら進行していくのは、好きですし、まあ得意なほうだとは思ってますが、事前に起こることを様々な想定しながら先回りして考える、結構大変で。現実には、そういうことを先回りして考えて手を打ってくれる人がいるから、今までは現場で自由に振る舞えたわけで、いざ自分が事前に手を打つ役目になると、いや〜まだまだ。札幌国際芸術祭のディレクターが現時点で動まってるのなら、それは、そういうことを先回りして考えて手を打ってくれるスタッフに恵まれているからだと思います。

実際、音楽の現場だと自分が把握してる、顔の見える、名前を知ってる人達がほとんどなんです。言い換えれば、自分の責任で、ものが動かせない規模だっと思ってるんです。でもこれが芸術祭規模になると、自分が把握できないことが多くなってしまふ。これまでのような形では「責任」を負えないし、負える範囲を超えているように思っています。そんな中で、どう自分が責任をとれる形に少しでも近づけていくか。そんなところから音楽のチーム編成の名を借りて、企画チームのメンバーたちをバンドメンバーと呼ぶことにしたんです。苦肉の策ですが、でも少しでも自分がこれまでやってきたことに近づけることで、自分でも見えてくるものがありましたから。

中の人間には見えないものだってあるかもしれない。失礼にならないように、自分自身の視点で、しっかりと、その人たちと向き合う……それしかないように思います。結果的に、そこできれないものになることもあるかもしれませんが、でも最初から「ならでは」のものにすることは考えません。ただ、そうやって向き合ってきた中で、内外、様々な場所に第二の故郷とも呼べるような、大切な場所が生まれてきました。札幌もその一つです。

▼それが、様々なプロジェクトに繋がって行くんですね。大友さんが長年にわたり演奏活動等で訪れている北海道や札幌に対して、今現在はどうの印象をもっていますか？

初めて国内で本州を出て訪れた場所が北海道だったんです。1984年でした。地平線とこまでも続く道、全てがとても新鮮でした。その後、僕は旅する人生になっちゃって、そうなるのと、そうしたエキゾチックな風景を見たくら



大友良英+青山泰知+伊藤隆之《without records - mot ver. 2015》撮影：丸尾隆一



「さっぽろコレクティブ・オーケストラ」の様子/プレワークショップ(2016年4月20日撮影)

いろいろな考えた挙句に「芸術祭ってなんだ？」というテーマを投げかけたのも、同じような理由です。問いかければ答えが返ってくる、そうすることで多くの人を巻き込みたいって思いもありましたが、同時に、これは自分への問いかけでもあって、そのことを見えてくるものを大切にしたいかったです。こんな問いかけをすれば、そもそも芸術ってなんだ？って問いも当然のように出てきます。なんか、嫌なんですよ、すでに芸術って認められているようなものを追承認するだけみたいになるのは。そんなことより、誰も芸術だなんて思ってもいないものの中に、本質的にはより芸術に近いようなものを発見していく。でもそれは、そうではないものも芸術として認めるってなんじゃなくて、芸術だけが、芸術の役割を担っているわけじゃないぞって言うたいんです。大げさに言えば、芸術という制度からものを見るんじゃなくて、そもそも、何のために、この表現あるんだってところに立ち返るってことだと思ってるんです。

いではあまり驚かなくなりました。世界中どこに行っても、残念ながら驚きません。旅暮らしをしていると、本能的に旅先で自分にとって居心地の良い場所を見つけているようになっちゃいます。だから、よくこの土地にいても、その土地の印象を聞かれますが、「ごめんなさい、今は、土地の印象をどうこう思わない残念人間になってしまいました。

ただ、それでも大切なのは、北海道がどうこうではなく、そこで出会った人たちなんです。その人たちの生き方と接することが、僕にとっては札幌であたり北海道の最大の印象です。

もうひとつ、札幌の好きなところを言ったら、サイズ感です。全体はめっちゃ広くて、都市も自然も満載ですが、街の中心機能のあるエリアが歩けちゃうってのがいい。地価が東京より安いことも関係しているかもしれないけれど、若い子たちが何か商売なりお店を始める場所が街中にあるってことも、とってもいいなって思っています。あとね、食べ物。もう北海道は文句なく最高に美味しい場所です。あ、すいません、なんか、結局乗せられて、褒め言葉ばかり言ってますね。

サイアフ SIAF2017 開催概要

札幌国際芸術祭2017 Sapporo International Art Festival (SIAF) 2017

テーマ：芸術祭ってなんだ？

開催期間：2017年8月6日(日)～10月1日(日) [57日間]

会場：札幌芸術の森/モエレ沼公園/まちなかエリア/円山エリア/札幌市資料館/JRタワープラニスホール/札幌大通地下ギャラリー-500m美術館 ほか

ゲストディレクター：大友良英

随時更新中！

WEB ▶ <http://siaf.jp> Facebook ▶ 札幌国際芸術祭 blog ▶ <http://daily.siaf.jp/> Twitter ▶ @siaf_info

*劇判…映画やテレビドラマ、演劇やアニメで流れる伴奏音楽

大風呂敷って何？

各地から集まった色とりどりの布地を使い、ボランティアの方々の手により縫い合わされた大きな風呂敷。この大風呂敷は、2011年3月11日の東日本大震災後に結成された「プロジェクト FUKUSHIMA」の象徴とされています。札幌では札幌国際芸術祭（以下、SIAF 2014）の特別プログラムとして「フェスティバル FUKUSHIMA 北3条広場の盆踊り」の際に、地面に敷きつめられた大風呂敷の上で生バンドによる盆踊りが行われたほか、一般公募のメンバーが思い思いの楽器を持ち寄って即興でオーケストラ演奏を行う「オーケストラ SAPPORO」が行われました。その後、2015年から、「この盆踊りと「オーケストラ SAPPORO」は、札幌駅前地区の大風呂敷の活動は継続しています。

SIAF 2017では、市民と一緒につくる芸術祭の象徴となるプロジェクトとして、「大風呂敷プロジェクト」を実施します。市内各地から集まった布で巨大な大風呂敷やのぼり旗を制作し、札幌市北3条広場をはじめとする市内のさまざまな場所に展開して SIAF 2017 を彩ります。

また、会期中の大風呂敷の各所設置に向け、2016年11月より制作準備が本格的に始まります。キットオフに合わせてイベントを開催するほか、布を回収するボックスを札幌市内イオン北海道7店舗などに設置します。



大風呂敷制作チーム座談会！

大風呂敷づくりを行う上で、なくてはならない存在である大風呂敷制作チーム。主に『さっぽろ天神山アートスタジオ』を大風呂敷工場として活用し、大量の布をミシンで繋ぎ合わせ、1枚の大きな風呂敷やのぼり旗へとつくりあげてきました。今回はチームメンバーの皆さんに、参加のきっかけや普段の活動の様子などについてお話を伺いました！

大風呂敷を“広げ”よう

～みんなで作る芸術祭～



大風呂敷制作チームのみなさん



▼大風呂敷制作に参加しようと思ったきっかけや、最初の印象はどうでしたか？

あ SIAF 2014のボランティアをしたと思って説明会に行ったら、参加するには電話をして予約する必要があるとのことでした。でもさっぽろ天神山アートスタジオ（以下、天神山）での大風呂敷制作にはそれがいらない。しかも天神山は家から近いし、ここがいい、と思いました。それだけで参加して、何が出来るのかもわからないまま説明を受けて、じゃあこれこれ縫えばいいんだと。ミシンをかけたにっただけですね。

と 私は広報さっぽろの募集を見て、天神山は自宅から近いし良いかなと。「縫う」以外に興味はなかった。で、「縫える」というだけで行きました。

そ 私は2014年にSIAFのボランティアをどっぷりやっていて、札幌駅前通地下歩行空間（以下、チ・カ・ホ）で行われた大友良英さんのトークイベントの際もスタッフをしていました。大風呂敷の話も聞いて、「いいな面白そうだな」と思いながらも縁はありませんでした。2015年になって、チ・カ・ホでのイベントで「さっぽろ八月祭」の関係者に声をかけられて、手伝ったのが参加のきっかけです。

ひ 私は、2012年に札幌で初めて行われた「プロジェクト FUKUSHIMA」のイベントに行っていたんです。だから、「オーケストラ SAPPORO」の参加は皆勤賞（笑）。その時に大風呂敷から作られた旗は見ていたので、「大風呂敷もこんな感じなんだ」という思いはボンヤリありました。でもあんなに大きいものとは思わなかった。

さ 私は「プロジェクト FUKUSHIMA」のネット中継を毎年見ている、札幌での大風呂敷づくりは一体

▼個人個人が好きな時に来て、好きなだけ作業して帰る、という状況が自然にありますよね。

あ そう。基本黙々と作業しているから。

▼作業が終わった後、皆さんで料理をつくったり、飲みに行ったり、交流も多いですよ。

す 毎年5月に天神山で開催するお花見が良いですね。

あ 花見によって毎年ギョウギユツと（絆が）強くなる。花見ごっこ。

▼大事なイベントなのでね！

あ 大事ですね。

す 幸せですね。

▼活動の魅力・醍醐味はどんなところだと思いますか？

あ やっぱ、完成した大風呂敷を上げた時。

あ ああ大きいのを皆でパンツと畳むのも気持ち良くない？

さ 大風呂敷の上を歩くのも楽しい。

ひ スケール感がやっぱり（良い）。自分たちの生活している通常のスケール感と全く違うものが広がるから。

さ “景色が変わる”っていうのは面白いですね。

ひ そう。大風呂敷が広がって、一瞬のうちに景色が変わるっていう。

さ それから、布を提供してくれた人も、自分の布を見に来るんですね。

▼そういう意味では布を提供してくれた方も参加者の一人ですね。

ひ そうですね。必ずしも縫わなきゃいけないわけじゃなくて、色んな参加の仕方がある。

どんなことになるのかな、と思っていました。大風呂敷の制作を手伝うのは（規模が大きくて）ちょっと怖いかなと思っていましたが、友達が先に参加したんですね。で、「どうですか？」って訊いたら、「あまり人と会わないし、ひとり黙々と縫ってる」と。それで、あの大風呂敷の景色を広げるのに、こんな人数でできるのか、と思ったんです。私縫い物下手だし尻込みしてたんですけど、「まあいいか」と思って参加しました。

▼メンバーにはこの様な人がいるのでしょうか？

す 女性は年齢が上の人から若い子までいるし、男性もいます。老若男女ですね。あの感じがとても素敵なんです。それでも何となく形になっていく面白さがあった。

▼あまり制約や決まり（ルール）がない、ざっくりばらんな雰囲気を楽しむ、という感じでしょうか？

す そうですね。来るのもバラバラ、帰るものもバラバラ。これだったら私にもできるかなと思いましたが。

▼例えば、子どもや子ども連れの方、あるいは高齢者だけ参加したい、という方も参加できますか？

ひ 全然大丈夫！

あ 「お母さんと女の子」という参加は多かったですね。

す 旦那さんが亡くなった60代の方で、ボランティアをしてみたいけどきっかけがなかった、という方がいらしたこともありました。お話をしながら持参した着物をほどこいて、大風呂敷の布として提供してくれました。

あ 一人で来る方も多かったです。

▼SIAF 2017では「大風呂敷プロジェクト」も実施され、大風呂敷づくりはますます盛り上がりそうですよね！

あ 大風呂敷工場を増やしたいです。施設や学校などで独自の工場をつくるというか。

ひ そこで自主的にやってくれようかな、中継地点のところが増えていって、そこでも楽しんでもらって、最終的にみんなで集まって大風呂敷を広げるということができたら面白いかなって。

▼まだ構想の段階ですが、「じたく工場」というアイデアがあるとも聞いています。

ひ 「じたく工場」というのは、自分のおうちで大風呂敷を縫うことです。

あ 自分たちが縫ったものが芸術祭の何かになるんだ、自分も芸術祭に参加しているんだ、というのが良いと思うんです。大風呂敷をつくるのってすごく楽しいんですよ。縫うとか、ほとんど布を足していかなくてか、全然技術はいらないじゃないですか。で、大した技術はなくても、何かをつくらせている感がある。それがどんどん大きくなっていく、というのが私はすごく楽しい。家に居ても、布があつたら縫いたくなっちゃうし（笑）。多分、私だけじゃなくて誰にでもできることでしょう。それこそがすごく楽しい、ということを伝えたいです。

（取材日：2016年9月24日）

詳しくはこちら↓

プロジェクト FUKUSHIMA!
<http://www.pj-fukushima.jp/>
 さっぽろ八月祭
<http://www.8fes.com>
 さっぽろ天神山アートスタジオ
<http://tenjinyamastudio.jp/>

大風呂敷に関する情報

☎ (仮)SIAF大風呂敷工場 @SIAFofuroshiki
<https://twitter.com/SIAFofuroshiki>
 f <https://www.facebook.com/SIAFofuroshiki>
 ✉ ofuroshiki@siaf.jp

札幌の色って どんな色？



2016年5月から活動が始まったSIARラボ編集局の編集会議では、情報発信をする上で自分たちが暮らしている札幌がどんな場所であるのかを考えたり、調べたり、話し合ったりしています。その過程で、参加者から色それぞれに札幌の特色であるような面白い名称(例・雪まつり、藻岩山、豊平川)がつけられている、「札幌の景観色70色」と呼ばれているものがあることを知りました。色を介して札幌を見つめ直してみると面白いのでは、という理由から数度の会議を経て、「札幌の色」をテーマとしてとりあげることに決めました。参加者それぞれが独自のリサーチ活動を行い、集めた情報の一部を紹介します。

Topic!

調査員：高橋さん / 榎
私が子供の頃、札幌を「エルムの都」と呼んでいたことを記憶しています。その頃はエルムという言葉にハイカラなイメージがして、札幌を誇らしく思ったものです。あれから数十年、札幌の色を見つけて、景観色70色に「榎」の色を見つけて、記憶の奥底で埃を被ったエルムのごとを改めて調べてみようと思いました。

札幌は、榎の樹が多く群生する 原生林の上に築かれた街

札幌の開拓前の土地には、榎の樹を中心に谷地榎、水榎、楓、柏、桂などの落葉樹が群生する。水と緑が豊かな原生林だったようです。この地は豊平川扇状地と言われ、長年の大量の河水流と土石流によって運ばれた砂礫が堆積してできた地で、アイヌでは濁水期の豊平川をサツポロベツ(乾いた大きな川)と呼び、札幌の地名の語源にもなったように、河で開かれた水と緑と樹木に恵まれた肥沃な土地です。このような扇状地は水が豊かで水捌けが良く、水害の少ない肥沃な土地を好んで育つのが榎の樹なのです。アイヌは榎の樹が多い土地に住まいを構えたといわれ、人間の生活環境としても耕作地としても最適な場所だと考えられます。この榎の樹が多く群生する扇状地に、北海道の中心地が築かれたことに、先人達の見識と夢を感じてしまいます。

を広げたように雄大で美しく、札幌の名所旧跡には必ずと言ってよいほど榎の大樹を見かけるなど、札幌を代表するのに相応しい郷土樹です。もし札幌の原風景を見たいという方には、北海道大学の構内に残る1,500本の榎と、北大植物園の240本の榎の樹林の散策をお勧めします。「こなら、札幌景観色の「榎」色をじっくり堪能できて、札幌の自然の豊かさを満喫する」ことができればいいでしょう。

**榎の樹にまつわる
神話や伝説などが面白い**

アイヌ語では榎の木をチサキニと言い、火を擦る(火を起す)木を意味し、榎の木を火の神様として崇められてきました。また、アイヌの神話では地上にいる美しいハルニレのチサキニ姫に、天界の雷神カンナカムイが恋をし、誤って雷鳴と共に雲の上から落ちてチサキニ姫が炎に包まれ、その火の中からアイヌラックル(神の子でアイヌの始祖)が生まれたといわれています。

北欧の神話では全知全能の神オーディンとその兄弟が浜辺で二本の流木を拾い、その一本のトネリコ(榎)の木から男を造り名をアスクとし、榎の木から女を造り「エムブラ」と名付け、地上に初めて人類を誕生させたということです。この「エムブラ」が「エルム」の語源だといわれています。

アメリカのマサチューセッツ州ボストンには、18世紀後半にイギリスからの独立戦争の発端になった榎の樹の広場があり、その樹を「Liberty Tree(自由の木)」と呼び、アメリカ建国のシンボルソリーとして崇められてきました。北海道開拓のお雇い外国人ホールレス・ケブロン、クラーク博士、ブルックス博士はマサチューセッツ州生まれで、独立戦争に学び南北戦争を経験した世代として、札幌の榎の木を見て「Liberty Tree(自由の木)への敬意と郷愁から、札幌の榎の木の保存を推進したといわれています。

SIARラボ編集局とは？

札幌の暮らしにまつわる「人・もの・こと」を題材として、この土地ならではの情報を集め、編集し、発信していくプロジェクト「SIARラボ編集局 編集会議」。編集会議はどなたでも参加することができ、参加者自らが集めた情報を元に、編集方針や内容、その取り扱いや、活用する媒体について検討していきます。2016年5月に行った第1回目の編集会議以降は、月1回の頻度で会議を行っています。

★札幌の景観色70色

札幌における人工物や自然物の色彩変化や風土イメージ、色彩感覚アンケートなどを多岐にわたって色彩分析し、札幌の景観色として70色を定めたものです。一定規模以上の建築物の増改築や大規模な修繕、外観の過半の色彩変更などを行う場合、基準となる色彩を具体的に示すためのガイドラインとして使用されています。



景観色が使われている例(色名) / 調査員：柄内くん
北海道庁日本庁舎(煉瓦、石切山、札幌軟石)
時計台(煉瓦、新雪)
豊平館(豊平川、新雪、札幌軟石)
札幌市資料館(煉瓦、札幌軟石)



▲北海道大学構内にある樹齢150〜200年のハルニレの巨木

札幌とは、開拓者達が たどり着いた約束の地 「エルムの楽園」

明治2年、開拓判官の島義勇はコタンベツ(円山)の丘に立ち、この地に本府を置いて、「五州第一の都(世界一の都)を造る」ことを宣言し、渾身の思いを込めて街づくりに没頭したとされています。島判官をそれほどまでに駆り立てたのは、榎の大樹が悠然と立林する雄大な大地に心を奪われたからなのでしょう。

いま私たちが住む札幌は、開拓者達が苦難の果てにたどり着いた希望の地であり「約束の地」なのです。札幌の景観色「榎」をキッカケにもっと札幌のことを知り直し、札幌を愛し、札幌の未来に夢を燃やさなければと感じています。クラーク博士が残したであろう札幌の「Liberty Elm」は、今でもずっと私たちを見守っています。

参考・用：『さっぽろ文庫3巻 札幌の樹』、『さっぽろ文庫30巻 札幌の四季』、『アイヌの神話 金田一京助著』、Wikipedia:アスクとエムブラ

掲載されている情報は、現在調査中のものです。各調査項目について情報などをお持ちの方は、SIARラボまでお知らせ下さい!
siaflab@siaf.jp

鋭意調査中!

調査員：わたなべさん / さっぽろたまねぎ 札幌玉葱・キャベツ

札幌の景観色70色内で割り当てられている番号で連番だったこの2色。食いしん坊としては見逃せません。札幌に縁の深い野菜の色なのです。

幻の玉ねぎと言われる札幌黄(さっぽろきん) / さっぽろきい、漬物時代に、店先に並ぶ超巨大キャベツ札幌大球(さっぽろだいまるとう) / さっぽろおおたま。どちらも歴史ある野菜でありながら、栽培量が激減し、このままなくなってしまう?!というところを、近ごろ再び注目を集めています。2014年には札幌市農協により『札幌伝統野菜』としてこれらを含む5品種が、選定されました。この機会に札幌の野菜について、ひもといていきたいです。

調査員：岩下さん / あいさとの里

以前から藍染に興味があったこと、『あいの里』という地名は、藍と関係があるのか、それとも『愛の里』なのか、疑問に思っていたのでこの色を選びました。

明治の開拓期に、付近一帯で藍の栽培が盛んであったことから、あいの里と名付けられ、後にそれが正式名称になったそうです。現在あいの里で、藍染は細々と受け継がれているようなので、今現在の藍染はどのようなものになっているのか、詳しく調べて可能ならば実際に体験してみたいと思います。

調査員：芳賀さん / オーローラ

札幌の景観色70色の中に「オーローラ」という色を見つけ、なぜ札幌でオーローラなのか、どういった関連性があるのかを調べてみました。

調べてみると北海道の各地で「オーローラ」が観測されたことはありますが札幌ではまだないようです。オーローラといえば、全道としてみれば納沙布岬の「オーローラタワー(望海の塔)」、オーローラを再現する知床のイベント「知床ファンタジア」がありますが、札幌では大通1丁目から西にのびる地下街の「オーローラタウン」と札幌ドームで2015年から運用が始まった「オーローラビジョン(三菱電気株式会社登録商標)」くらい。

もしかすると札幌では見られない「オーローラ」を、景観色として建物で再現してみたいから名付けられたということなのかもしれません。

ただいま、景観色のオーローラ色を使用した建物を探案中です。

調査員：長縄さん / かいたくし 開拓使

編集会議で札幌の景観色70色を取り上げたときに、「開拓使」という濃い灰色が話題になりました。付随の解説資料には「開拓使は威厳があることを色で示した」とありましたが詳しく書かれていなかったため、開拓使の時代を調べてみようと思いました。

いくつかの本を調べるうちに思い当たった説が、開拓使が使用していた開拓庁舎は火事で焼けてしまった。その後に残った灰の色説(そんな景観色「ちよつ」と切なさぎる...)。

そして開拓使がいた時代に、庶民を見守り続けたあるものに出会いました。そのあるものは...

なしてか読まされる

北海道弁をモチーフにした短編小説第二章
「ばあちゃんと美流渡 冬」 羊ヶ丘眞作

札幌からJRで一時間弱の岩見沢駅から、さらにバスに揺られること数十分の僻地「美流渡」。この美流渡にある祖母家で夏休みの課題制作を行った美大生の崇史は、冬休みもまたこの地へとやってきた。初めて見る美流渡の冬景色。一面白く覆われた畑にキツネの足跡が点々と横切っている。

「たかす、お前この前の夏はこつたらいっぱいゴミを集めてあったらもうやってたけど、今度はどうしたらもん作るんさ？」

「冬の課題は『アースワーク』だからまあ雪で何かやろうと思ってるよ。ちよつと雪かきの道具貸して欲しいんだよね。何だっけ、ママさんダンブって言うの？」

「ああ、ダンブもシヨベルもあましてるから良いけどよ、アースワークってなんだべ。ばあちゃんわからんよ。」

「わかるようになって言われても、アースワークはアースワークなんだよなあ。」

「カタカナばっかし使って、あんたもいい

ふりこきたな。そいでママさんダンブ使って何するんさ。雪なげかい。」

「それはまだ考え中だけど、使ったこと無いから、とりあえず触ってみていな。」

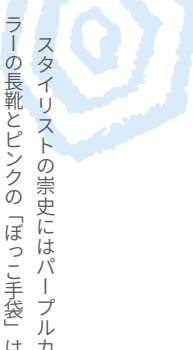
「なんぼ札幌だつてもあんたの家マンションだから雪なげなんかないことないんだべさ。ゆるくないよ、雪なげは。ダンブはあつちのかしがつたガレッジにあつたら、ついでに玄間まえの道の雪かいておいて。」

「わかつたよ。じゃあ、ちよつと行ってくる。」

「まして、まして、あんたそつたらがच्चい靴で表出たら、てっくりにかえつてあおたんつくくるっしょ。」

「あおたんくらい、どうってことないよ。」

「どつたらことねつたつて、昨日から急にしばれてつから凍凍つてわやだぞ。じよつばらんでばあちゃんの長ズック履いてけつて。そいでほれ、ぼつこ手袋。これ履かんとしやつこいしやつこい。」



スタイリストの崇史にはパープルカラーの長靴とピンクの「ぼつこ手袋」はなんとお気が引ける代物だったが、たしかにそんなことも言っただけならいられない状況である。止むなく祖母の提案を飲むことにした。

「しつづけ、ばあちゃんもつご飯支度するからよ。晩はちゃんちゃん焼きしやつから。制作制作つて、あんたの通知箋どんなあんなばいだから知らんけど、けつぱつてやれな。」

「ばあちゃん、僕もう大学生だから通知箋は無いよ。」

「そつかさつつか。まあげつぱでなかつたらええ、ええたかすもいつのまにこつたらでつつかくなつたんだかな。してお前入つてくるときは雪ばあちゃんどほろつてじよつびんかつてよ。」

生まれて初めて体験する雪かき、そしてママさんダンブ。美術大学でのアースワークという課題がなければこんな体験をすることがなかった自分。三世代の間にまたがる都市化の波はこうも人の生活を変えてしまったものなのだろうか。崇史がそんなことを考えている間にも、雪はしんと降り積もっていた。

対訳用ミニ辞典

- こつたら…こんな
- あつたらも…あんなもの
- どつたら…どんな
- ママさんダンブ…雪かきに使う道具
- いいふりこき…格好つけ
- 雪なげ…雪かき
- ゆるくない…大変だ
- かしがつた…傾いた
- まして…ましてよ
- そつたら…そんな
- がच्चい…安っぽい
- てっくりにかえる…ひっくりかえる
- あおたん…あおざ
- どつたらことない…どうってことない
- しばれる…冷える
- わや…めちゃくちゃ
- じよつばら…強情を張る
- 長ズック…ゴム長靴
- ぼつこ手袋…2本指手袋
- 手袋を履く…手袋をはめる
- しやつこい…つめたい
- したつけ…そうしたら
- ちゃんちゃん焼き…鮭に味噌をつけ、蒸し焼きにした郷土料理
- 通知箋…通信簿
- あんなばい…調子
- けつぱつて…がんばって
- げつぱ…びり
- ほろろ…はらう
- じよつびんをかる…鍵をかける

2016年度

SIAFラボの活動

SIAFラボ編集局

暮らしにまつわる「人・もの・こと」を題材として、この土地ならではの情報を集め、編集、発信していくプロジェクト
→ラウンジトーク/編集会議

ツララボ Bent Icicle Project - Tulala

「つらら」を題材としたいアイデアを持ち寄り、ワークショップやイベントを通して雪国ならではの暮らしの可能性を検証・再考するプロジェクト

SIAFラボの活動についての詳細は、WEBをご覧ください。

▶ <http://siaf.jp/siaflab/>

編集後記

2016年度前期のSIAFラボの活動は、「札幌・北海道を知る!」をテーマに、単なる歴史探訪にとどまらない現在から未来を創造するための情報発信について考えてきました。後期は、そこから新しいメディアを生み出すことに挑戦していきます!乞うご期待!

SIAFラボマネージャー 丸るし

様々なプロジェクトで奏でられる音楽を、自分自身ももっと参加していきたいと思いました。

P1-2「大友良英×札幌」担当
SIAFラボスタッフ たくま

大風呂敷のおおらかさや明るさやあたたかさ、札幌にひろがるが良いです。

P3-4「大風呂敷を広げよう」担当
SIAFラボスタッフ かわなり

紙面に關するご意見やご感想など、お待ちしております!

編集会議はこれからが本格的な活動となりそうですが、今後どのような形になっていくか楽しみです。

P5-6「札幌の色ってどんな色?」担当
SIAFラボスタッフ すずきもと

Googleに「北海道弁 教えよう

裏表紙「なしてか読まされる」担当
SIAFラボ通信編集部員 こばやし

前号に引き続き、デザインを担当させていただきました。前号よりも、よりパワーアップしたデザインに仕上がった気がします。嬉しい!!

SIAFラボ通信学生デザイナー たらおか

SIAFラボ通信 第3号
2016年10月発行